

「犬」に関する日中諺の対照比較考察

王 雪

0. はじめに

0.1 犬と人間の歴史

犬と人間とのつながりは、今から約1万年以上も前の時代に始まるといわれている。その頃の犬は、オオカミやジャッカルと同じように群れをつくって暮らし、見つけた獲物を仲間で追って倒して食べるという生活をしてきた。しかしその後、犬は、人間の食べ残した動物の骨や肉などを食べているうちに、移動する人間について回って、犬たちも移動を続けるようになった。そして、夜の闇の中でも獣の接近にいち早く気づき、吠え立てる犬の鋭い嗅覚と警戒心に人間のほうで目をつけ、人間と犬の持ちつ持たれつの生活が始まるようになった。犬は単にオオカミの親戚から人間の友になっただけでなく、我々が生き残り、定住し、繁栄する上でも大きな役割を担ってきた。品種改良によって犬の便利な特性を伸ばした結果、牧畜犬や軍用犬、ソリ犬、警察犬、盲導犬など、それぞれの仕事に最もふさわしい能力をもった犬にするための改良が人間の手で繰り返し行われ、多種多様な犬が生まれるようになった。犬と人間の間でできた絆はだんだん世界を変えてきた。本稿では、主に諺という立場から、日本と中国両国民は犬に関する諺にどんな発想を託しているのか見てみたいと思う。

0.2 犬に関する諺の概説

諺は、観察と経験そして人類の共有知識によって、長い時間をかけて形成されたものである。その多くは簡潔で覚えやすく、言い得て妙であり、ある一面の真実を鋭く言い当てている。そのため、詳細な説明の代わりとして、あるいは、説明や主張に説得力を持たせる効果的手段として用いられることが多い。また、時代や社会の変遷を受け生まれ、諺も変わってきている。その為、諺は、国や時代により異なり、流行り・廃りもあるようである。このようなことは、犬の諺にも当てはまる。犬に対するその国の考え方の違い・時代の変遷による考え方の違いにより諺も違ってくる。欧米では、犬を非常に大切にす文化が育っており、特に欧州では先進的である。しかし、昔の欧州では、犬を品種改良して使役犬(軍用犬を含む)として使い捨てていた時代もあったようである(例:フランドル犬)。また、アジアでは、犬を食べる食文化の長い伝統を持っている国もあり、それが犬の諺に影響している例も見られる(飛鳥尽きて良弓蔵れ狡兎死して走狗烹らる)。総じて、昔の犬の生涯のイメージは、世界でも必ずしも良いものではなかったようである。

犬の諺には人間のさまざまな思いが託されている。現在では犬は人間のよきパートナーとみなされている。しかし、諺に表されている犬へのイメージはどうであろうと本稿では検討してみたいと思う。そこで、犬に関する日中両国の諺の対照比較を通して、両国民は犬の諺に託されている各自の文化や世間の様態などを明らかにしたい。

1. 考察対象と考察方法

本稿で扱われる考察対象は、犬に関する日中の諺である。

日本語の諺の用例は『故事・俗信ことわざ大辞典』（尚学図書編集、1981）を資料に、諺を取り出す。『故事・俗信大辞典』は専門事典としてこれまでにみられない規模のものとなっている。一方、中国語の諺は、温端政などが編集した『中国谚语大全』（2004）を中心に、諺の用例を取り出している。この辞典は、約十万項目の諺を集録している。中国の現代諺辞書において、諺の数で最も規模の大きい諺辞典である。また、中国から伝わってきて、出典のある「ウサギ」にまつわる諺は10句ある。そして、日本本土の「犬」に関する諺は33句あり、すべて「J」という符号をつける。それに対し、中国の「犬」に関する諺は36句ある。ただ、前に挙げられた出典のある諺もプラスしたら、43句あるとみられる。

考察方法として、「中国起源の犬に関する諺」、「犬の性格や習性から見る両国の諺」、「犬の諺に見られる人間関係と人間性について」、「処世と社会状況を語る日本の諺」、「罵倒語と対句型である中国の諺」という五つの面に分け、諺の対照比較考察を行ってみようと思う。

2. 犬に関する日中の諺の対照考察

現代人の生活では、犬はペットとして一部分の人間にとっていなくてはならない存在になった。犬の習性は基本的には飼い主に強い服従と深い愛情を示しているが、その逆に見慣れない人や動物には防衛本能から積極的に攻撃する特性がある。それは、いわゆる犬のもっとも本能的な習性である。それでは、実生活から言葉の世界へ転換してみると、「犬」について、またどのような評価があるのかを見てみよう。広辞苑で見ると、「犬」には次のような否定的な意味がある。

- ・ ひそかに人の隠し事を嗅ぎつけて告げる者。回し者。間者。
- ・ ある語に冠して、似て非なるもの、劣るものの意を表す語。また、卑しめ軽んじて、くだらないもの、むだなものの意を表す語。例えば、「犬侍」「犬死」「煩惱の犬」「負け犬」などの言葉がある。

中国の「漢典」という辞書を調べてみると、次のような解釈が出ている。

名詞として使われるとき、犬という本義以外、悪人を比喩するという説明がある。形容

詞として使われるとき、ののしる言葉、極端に軽蔑の意味を持つ。また、動詞として疲れる場合、媚びるという意味を持つ。

このようにしてみると、日本と中国では、共に犬に対し、あまりいいイメージを持っていないようである。なら、諺の世界はどうであろうと見てみよう。

2.1 中国起源の犬に関する諺

昔は中国の古典文学から伝わってきた諺はますます日本に定着されていた。そこで、犬にまつわる中国出典の諺をあげてみよう。

番号	日本語の諺	出典	意味	中国の諺
1	犬馬の心	『史記—三王世家』	臣下が君主に忠節を尽くし、その恩に報いようと思う心。	犬馬之勞
2	蜀犬日に吠ゆ	柳宗元の「答韋中立論師道書」	蜀は山地で雨の降ることが多く、太陽の出ている時間は少ないので、日が出ると犬が怪しんでほえるということから、無知のために、あたりまえのことに疑いを抱くたとえ。見識の狭い人が賢人のすぐれた言行を疑い、非難するたとえ。	蜀犬吠日
3	「兎を見て犬を呼ぶ」	『战国策・楚策四』	①過ちを犯しても、まだ取り返しがつくことのとえ。 ②状況を見極めてから対策を講じても遅くない意。 ③手遅れのたとえ。	見兔顾犬
4	狡兔死して良狗烹らる	『史記(越王勾踐世家)』	すばしこいうさぎが死ねば、獵犬は不要になって煮て食われる。敵国が滅びると、軍事に尽くした功臣はかえってじゃま者扱いされて殺されることのとえ。	狡兔死走狗烹
5	虎を画いて犬に類す	『後漢書の馬援伝、十八史略の東漢』	①才能のない者が優れた者のまねをして失敗するたとえ。 ②ものを学んだのにかえってやりそこなってしまうことのとえ。	画虎类犬
6	羊頭狗肉	南宋時代の禅書『無門関』	外見や見てくれがよくても、内容や実質が伴っていないこのたとえ。	挂羊头卖狗肉
7	犬牙牽制	『史記』孝文本紀	隣りあう国の領土を犬のきばのように入り組ませて、相互に牽制させること。	犬牙牽制

以上のようなことわざがあることは日本が中国から文化を吸収する歴史の長さを語られている。

2.2 犬の性格と習性から見た両国の諺

犬の性格と習性といえば、飼い主に忠実に服従する、逃げるものを追いかける、警戒心が強い、鋭い臭覚がある、というものなどがある。次に犬の性格と習性について語る日中の諺を見てみよう。

- (日) J1 「吠える犬は噛みつかぬ」
J2 「犬の糞も焼味噌も一つ」
J3 「犬の川端歩き」
J4 「犬の遠吠え」
J5 「飼い犬に手をかまれる」
J6 「犬は三日飼えば三年恩を忘れぬ」
J7 「一犬虚に吠え万犬これに和す」
- (中) C1 「狗吠老虎不知死」
C2 「狗急跳墙，兔急咬人」
C3 「狗记路，猫记家，小孩记妈」
C4 「狗记三千，猫记八百」
C5 「狗见骨头亲，横竖一家人」
C6 「狗见兔子，不会不捉」
C7 「子不嫌母丑，狗不嫌家贫」

まず、両国の諺の意味を見てみよう。日本の諺において、J1 では、人を脅したりやたらに威張ったりする者は、むしろ実力はなく何もできないものだということであると述べている。J2 では、きれいなものも汚いものも、良いものも悪いものもごちゃごちゃにするたとえ、無茶苦茶なさまを語られている。J3 は、いくら歩き回っても何の得る所もないこと、また金銭を所持しないで店頭をぶらつくことのたとえである。J4 は臆病な者が陰で虚勢を張り、または他人を攻撃することのたとえである。J5 は、普段目をかけて世話をしやり、恩を感じているだろうと思っていた者に裏切られたり、害を加えられたりすることのたとえである。J6 は、三日しか飼わない犬ですら主人に忠義を尽くすのだから、人間はなおさら恩知らずであってはならないという戒めである。J7 は一匹の犬が何かの影を見てほえると、あたりのたくさんの犬が、その声につられてほえたてる、ということから、誰かがいい加減なことを言い出すと、多くの人がよく確かめずにそれを言いふらすことをいう。

一方、中国の諺を分析してみよう。C1 では、犬の大胆さを語っている。C2 では、人はひどく追い詰められたら、どんなに危険なことでもすることができるといっている。犬を人間に喩え、両方の似通っているところを語られている。C3 では、犬と猫の記憶力から、

小さい子供の記憶力にたどり着き、家畜と人間の記憶力のよさを語っている。しかも、それぞれの本能が違うので、記憶する対象も違いただろう。C4 では、犬は数字を三千ぐらい覚えられとしたり、猫のほうは八百しか覚えられないと述べている。犬の記憶力をはるかに猫より優れていると語っているのだろう。C5 では、犬は骨に目がない、どんなに見ても、親しみを感じているようだと語っている。もともと犬は骨をかじることが好きな動物である。この諺は犬の本能に関わっているだろう。C6 も犬の本性を語っている。小さい動物を見ると、走り回って、追いかける性格の持ち主である犬は当然ウサギを見たら、見逃すわけには行かないだろう。C7 は親孝行で、仮に暮らし向きが悪くともそれを苦にせず、自分の家を心から大切にすることのたとえであるが、どんな国であろうと、それが祖国であるからには、決して捨ててはならないこともいう。話し言葉でも書き言葉でも用いるプラス評価の語である。

両国の諺の意味を分析し終え、その異同を見てみよう。日本の諺において、J1 から J4 までは、人間は犬の性格や習性などをしっかりつかみ、あまりプラスの意味でないことを諺の中に託しているようである。J6 は犬のよさを描いている。J7 は表から犬のあまりよい習性ではないところを描いているが、実は犬のこういうところに似通っている人間の習慣も暗示している。一方、中国の C1 と C2 も同じく犬のよくない習性と性格を語っている。C3 と C4 は逆に犬の長所を述べている。ただ、C5 と C6 はプラスでもなく、マイナスでもない意味で、ただ、犬の習慣だけ述べている。C7 は犬が恩を知る正確を語っている。以上の分析から見ると、中国人にせよ、日本人にせよ、犬に複雑な感情を抱いているようである。犬の感情深さに感動していると同時に、犬のよくない習性と性格を批判しているということは両国国民ともに同じところである。ただ、犬の習性と性格もさまざまであるので、諺の中に反映されているのは異なる角度から見ている人間の考えたことである。

2.3 犬の諺に見られる人間関係と人間性について

2.3.1 人間関係

- (日) J8 「犬も朋輩、鷹も朋輩」
- J9 「犬猿の仲」
- J10 「夫婦喧嘩は犬も食わぬ」
- J11 「孫を飼うより犬ころ飼え」
- J12 「犬兎の争い」

J8 では、役割が異なり、立場に上下の違いがあっても、同じ主人に仕える者は同僚だということを述べている。J9 は仲の悪い間柄のたとえである。J10 は夫婦の間の喧嘩を他人

が仲裁するのは愚かであるということである。J11 は孫を可愛がっても、後で孝行して貰えることは少ないから、犬を飼った方がまだましだと述べている。J12 は二人が争っているうちに、まんまと第三者につけこまれ、利益を横取りされてしまうことを述べている。

J8--J11 では、人間が集団や社会の中で生きている以上、必ずさまざまな社会関係、友達関係、家庭関係に関わらなければならないと述べている。その中で、J8、J9、J12 では、人間は無理やり犬をほかの動物と結びつけて、その関係を人間同士の喧嘩に喩えるのである。J10 は夫婦喧嘩が複雑過ぎて、あまり関わらないほうがいいという戒めである。J11 では、犬の感情深いところは時々人間でも勝ることがないと言っている。J12 は両者が争って弱り、第三者に利益をとられることを言っている。犬が兎を追いかけて、山を上ったりしているうちにどちらも疲れて死んだのを、農夫が自分のものにしたという寓話から来た諺である。

2.3.2 人間性を語る諺

(日) J13 「米食った犬が叩かれずに、糠食った犬が叩かれる」

J14 「頼むと頼まれては犬も木へ登る」

J15 「犬の糞で敵を討つ」

J16 「捨て犬に握り飯」

J17 「殿の犬には喰われ損」

J18 「飼い犬に手を噛まれる」

J19 「旅の犬が尾をすぼめる」

J20 「吠ゆる犬は打たるる」

J21 「闇がりの犬の糞」

J22 「噛み合う犬は呼び難し」

(中) C8 「狗眼看人低」

C9 「狗改不了吃屎」

C10 「人爱富的，狗咬穷的」

C11 「闷头狗，暗下口」

C12 「好狗不咬鸡，好汉不打妻」

C13 「狗仗人势，雪仗风势」

C14 「狗咬人，有药治；人咬人，没药医」

C15 「狗咬穿烂的，人舔穿好的」

C16 「狗朝屁走，人朝势走」

C17 「对强盗只能用刀子，对恶狗只能用棍子」

C18「絆人的桩，不一定高；咬人的狗，不一定叫」

C19「狗多不怕狼、人多不怕虎」

C20「狗瘦主人羞、子智父亲乐」

C21「人急悬梁、狗急跳墙」

C22「好猫管三家、好狗管三邻」

C23「爱叫的狗不咬人；咬人的狗不露齿」

C24「狗拿耗子多管闲事」

C25「狗被骨头所骗，人被钱财所蒙」

人間性は両国の諺の中でどのように描かれているのかを見てみよう。まず、日本の諺を分析してみる。J13 は大きな悪事を働いた者は罪を逃れて、小さな悪事を働いた者が罰せられるというたとえである。また、主犯が捕まらず、共犯の小者が罰を受けるというたとえでもある。J14 は人に心から信頼されて頼まれれば、できないことでもなんとかしてやり遂げようという気になるものであるというたとえである。J15 では卑劣な手段で仕返しをすることを述べている。J16 は骨を折るだけで無駄なことのたとえである。握り飯は犬の好物であるが、捨てた犬にやってもただ急いで食べて逃げて行ってしまっただけである。J17 では、勢いの強い者やったことは、たとえ道理にはずれていることであっても泣き寝入りするしかないといっている。J18 は目をかけていた部下や世話をしてやった相手に裏切られ、思わぬ害を受けることである。J19 では、家の中では威張っているのに、外に出たとたん意気地がなくなるような人を冷やかして言う。J20 では、じゃれつく犬は打たれないが、ほえつく犬は打たれると語っている。つまり人間でも、したってくる者はかわいがられるが、手向かう者にはくまれるということである。J21 は闇がりでは犬の糞は見えないことから、人の気付かない失敗は知らんふりをするという意味である。J22 では、けんかしている犬はいくら呼んでも来ないように、自分のことで夢中になっている人は、他から何を言われても耳には全く入らないことを述べている。

一方、中国の諺の意味を分析してみる。C8 の意味は犬は人を下に見るということである。“看人低”とは貧乏人を見下すことで、この言葉は、人を地位や財産によって分け隔てすることのたとえである。マイナス評価の話し言葉で、相手の懐具合で態度を変える現金な人間に対する罵倒語として、くだけた場面で用いる。C9 は犬は糞を食べるのをやめられないという意味である。人間の性分はそう簡単に改められるものではないことのたとえで、主に話し言葉で用いるマイナス評価の語である。C10 では、人は金持ちが好きで、犬は貧しい人を噛む。C11 はおとなしい犬は背後で人を噛むという意味である。C12 では、良犬は鶏を噛まず、良い男は妻を殴らないと述べている。C13 の意味は犬は内弁慶、雪は風の勢いに頼るということである。C14 では犬は人を噛むには、治る薬があるが、人は人

を噛むには、治る薬がないということを述べている。C15は犬は檻樓を噛む、人はいい服を着る人に偏る。C16は犬は尻に向かい、人は権力に向かう。C17強盗にナイフを使うしかない、犬に棒を振舞うしかない。C18はつまづく棒くいは必ずしも高くない；人を噛む犬は吠えないと述べている。C19では、犬が多くなったら、狼を怖がらず、人が多くなったら、トラを怖がらないを語っている。C20では、犬が痩せると、飼い主に恥をかかせ、子供が賢くなると、父親も楽しくなると述べている。C21では、人は急ぐと、首をつる；犬は急ぐと、塀を飛び降りる。C22はよい猫は三軒の家を管理し、良犬は三軒の隣人を管理するといっている。C23では、よく吠える犬は人を噛まない、人を噛む犬は歯を向けないといっている。C24では、犬はねずみを捕まる、大きなお世話と述べている。C25は犬は骨に騙される；人は財貨に騙されるという意味である。

以上の諺を見てみると、両国の諺では、ともにメタファー表現が多く使われている。犬の性格、習慣、習性などを借りて、人間と対比させ、犬のよいイメージと悪いイメージを諺の中に描かれ、人間性のよさと悪さを表現することは目的である。中では、犬への悪いイメージから、人間を風刺する諺の表現が数多いといわざるを得ない。昔の人間は犬に対する計別な気持ちが窺える。

2.4 処世と社会状況を語る日本の諺

- J23 「尾を振る犬は叩かれず」
- J24 「犬になっても大家の犬」
- J25 「犬骨折って鷹の餌食」
- J26 「飢えた犬は棒を恐れず」
- J27 「犬も歩けば棒に当る」
- J28 「門の前の瘦犬」
- J29 「犬一代に狸一匹」
- J30 「脳なし犬は昼吠える」
- J31 「煩惱の犬は追えども去らず」
- J32 「犬に論語（犬に念仏猫に経）」
- J33 「吠える犬にけしかける」

以上の諺を見てみると、J23は親愛の意を表する者は、攻撃されたりいじめられることはないという意である。J24は主人となる人を選ぶなら、頼りがいのある大物がよいということである。J25は、苦勞してあと少しで手に入るものを、ほかに横取りされることのとたえである。J26は生活に困っている者は、危ないことも悪いこともするものだという事である。J27には二種類の意味がある。一つ目は何かをやっていれば意外な幸運に出

会うことである。もう一つは何か行動すると災難に遭遇することという意味である。J28は弱者も後援があれば強いというたとえである。J29は普通の人にとって大きな幸運に出会うのは、生涯のうちでそう何度もないということのたとえである。J30は才能のないものに限って大きなことを話したり、大騒ぎをしたりするものであるというたとえである。J31では心を悩ます欲望などは追い払っても追い払っても離れないと述べている。J32は道理を説き聞かせても益のないことのたとえである。J33は勢いの強い者に、さらに勢いをそえることのたとえである。

いろいろ「犬」にまつわる諺がある。犬というものの性質や人とのかかわりの深さを表しているように思える。

犬とは、人にくっついてきて、かつ忠実で、あちこちろつき回って、何でも食べ、吠えて、狩猟などで人の役に立つ、といったところだろうか。言葉もそうであるが、人の生活や考えや文化に密接にかかわる諺に、「犬」にかかわるものがいろいろある。「犬も歩けば棒に当る」「夫婦喧嘩は犬も食わぬ」などはよく知られているが、その他にもいろいろある。次に、日本と中国には犬にまつわるどんな諺があるか、その違いがどうであろうかを一応見てみよう。

2.5 その他の中国の諺

C26 「狗嘴里吐不出象牙」

C27 「狗上锅台，不识抬举」

C28 「狗咬吕洞宾，不识好人心」

C29 「好狗不挡道」

C30 「好狗不跳，好猫不叫」

C31 「人怕没理，狗怕夹尾」

C32 「画人难画手、画树难画柳、画马难画走、画兽难画狗」

C33 「狗不离鸡窝，刀不离菜板」

C34 「狗不咬拜年的，人不打送钱的」

C35 「狗吃谁家饭，就守谁家门」

C36 「狗大自咬，女大自巧」

C26は犬の口から象牙は生えないという意味である。この語は晋の葛洪が撰した『抱朴子・請鑑』を典拠として程度の知れた人間がためになることを言えるはずがないという意味のこの慣用句は、比喩的なマイナス評価の罵倒語であり、話し言葉として、多く面と向かって使う。C27では、犬がかまどに乗る一付け上がって人の好意を踏みにじると語って

いる。せつかく人が目を掛けて、良くしてくれているのに、それをありがたいとも思わないことのたとえであり、マイナス評価の語で、話し言葉で用いることが多い。C28 では、犬が呂洞賓をかむ一善人の心が分からないと述べている。呂洞賓は説話に語られる八仙の一人で、慈しみ深く、人助けを常としていた仙人である。その呂洞賓にかみ付くという言葉は、善悪の区別がつかず、自分に手を差し伸べてくれる人に対して無礼なまねをしたり、攻撃的な態度に出たりすることのたとえで、よく話し言葉で用いるマイナス評価の語である。C29 は良犬は道をふさがずという意味である。人の行く手を阻んではならないことのたとえであるが、夢を実現しようとしている人の足を引っ張ってはならないという意味もある。マイナス評価の語で、話し言葉で使う。C30 は良い犬は跳ねず、良い猫は鳴かないという意味である。実力のある人は控え目でおごることなく、一心不乱にこつこつと働き、自分を誇ったり、ひけらかしたりしないというたとえである。意味的に中性の語で、書き言葉、話し言葉のいずれでも用いる。C31 では、人は筋が通らないことを怖がり、犬は尻尾を挟むことを怖がると述べている。C32 では、人を描くときに、手を描くのが難しい；気を描くときに、柳を描くのが難しい；馬を描くときに、走りを描くのが難しい；獣を描くときに、犬を描くのが難しいと述べている。C33 は犬は鶏の巣を離れず、包丁はまな板を離れないという意味になる。C34 では、犬は年始回りする人を噛まず、人はお金を送る人を拒まないと述べている。C35 では、犬は誰かの家のご飯を食べると、誰かの家を守ると述べている。C36 は犬は大きくなると、自然に噛むことができ、女の子は大人になると、自然に器用になるという意味である。

以上あげられた中国の諺の中で、C26 から C29 までは人を叱ったり、責めたりする言葉としてよく使われている。C30 から C36 までは良くも悪くもない言葉として用いられ、対句という形で、意味重点が主に後ろの文に置かれている。人間に対する人生の経験と教訓がその中に織り込まれている。

3. まとめ

犬は最も古くから人間と親しくしてきただけあって、暮らしの中で使われる語彙には犬になぞらえたものが豊富にあるが、その多くは犬を悪く捉えた言葉であり、しかも人に対する罵倒語が大半を占めている。これは人間が犬の卑屈さをさげすんだことによるもので、言語における犬はいいところがないに等しく、哀れの一語に尽きる。

犬は人類最古の家畜にして最古の友であり、その家畜化の歴史は古く、旧石器時代にまでさかのぼるとされる。太古の昔、猟犬、そり犬、牧羊犬、豚小屋や家屋の番犬として、生活のありとあらゆる場面で活躍していた犬は、人類にとって掛け替えのない存在であり、信仰の対象でもあった。しかしながら、古代中国の民俗語彙における犬のイメージは決して良いものではなく、犬と付く言葉はマイナスの意味を帯びるのが多い。十二支の動

物では、犬に関して、とにかく崇高や立派といったイメージがあまり当てはまらない。犬との長い共生の歴史の中で、人類は犬に対して、その忠実さ、従順さ、利口さをめでつつ、その卑屈さをさげすむという、まったく異なる二つの態度を一貫して取り続けてきた。それゆえ、数々の聖なる忠犬の伝説が生まれると同時に、犬の自主性のなさをこき下ろす言葉も多々生まれることになったのであるが、逆説的にいえば、この一見相矛盾する現象は、犬の一つの特徴を肯定と否定の両面から解釈した結果なのである。

以上で日中両国の犬に関する諺を対照比較してみたら、次のような結論になるのであろう。諺の中に見られる犬へのイメージが下記のようにまとめてみる。

良い面：「人に忠実に奉仕する」

良くない面：「気が短い」、「無能」、「けだもの」、「価値のない命」、「悪の手先」、「嫌われ者」、「駄文」、「ころころ変わる」、「鉄面皮」、「向こう見ず」、「くだらないことをする」、「二束三文の品」、「主人を頼みにする小物」、「下劣で無恥」、「物知らずで何を見ても珍しがる」、「自立心がない」、「人の言いなりになる」、「凶悪で強欲」、「正業に就いていない」、「金持ちや権力者にしつぽを振る」、「悪癖に染まっている」、「善悪をわきまえない」

日中両国の文化交流の歴史が長く、日本文化が発展しつつあると同時に、日中両国は異なる言語文化背景の下で、動物の暗喩表現を使用される諺も対等と不対等という現象も生まれてきた。暗喩という比喩表現の発生は主に認知主体自身に身体経験に基づいたからである。それに対する形成と理解はある程度異なる地理環境と社会文化背景の影響と制約を受けていると言っても過言ではないだろう。諺には、その国の自然風土や、生活様式、人々の価値観や、人生哲学などが濃縮されているのである。つまり、犬に関する両国の諺の対照比較考察を通して、われわれは、両国の国民が長年累積した知識や知恵や経験などを窺うことができる。

諺から教えられた知識や知恵、道理などは、教育上、どんな役割を果たすか次のように述べられている。岩永（1974：58）は、「諺にある『知恵』や『知識』を感じ取り、合点したうえで、展望力、想像力、構想力を働かせる契機を与えるのが諺の教育する力である」と述べている。浮田（1988：301）は「異文化摩擦の原因の一つがお互いの国民がお互いを知らないところにあるとすれば、諺の対照比較研究という形で、異文化理解を推し進めることは、言語教育、言語研究に課せられた一つの使命であろう」と指摘し、北村（1997：12）は「ことわざという架橋をとおして、私達は異文化を知り、過去を訪ね、さらには人間の内部まで探求する大きな可能性を手に入れているのである」と語り、藤村（1997：112）も「ことわざを生きた形で知ることは、その言語の文化を理解することにつながる。ことわざのよき手引き書は、外国人にとってその言語を学ぶ上で、絶好の教材の一つといっただろう」と述べている。これらの諺の対照比較研究を生かし、人間社会の更なる発展

に力を入れたいと思われている。

参考文献

- 岩永久次（1974）「俚諺考 —『タトエの論理』と教育について—」、『熊本商大論集』、
第42巻、熊本学園大学、pp.43-61
- 浮田三郎（1988）「日本語と現代ギリシア語（方言）の諺対照比較研究（2）— 素材「女」
の見られる諺を中心に —（日本語教育と異文化理解のために）」、『広島大学教
育学部紀要』第2部 第37号、pp.301-309
- 温端政主編（2004）『中国諺語大全』、上海辞書出版社
- 北村孝一（1997）「越境することわざ — ことわざ研究の可能性と課題」、『ことわざ学
入門』、遊戯社、pp.1-12
- 新村出編（2008）『広辞苑』第六版、岩波書店
- 尚学図書編（1981）『故事・俗信諺大辞典』、小学館
- 藤村美織（1997）「ことわざと現代 — ドイツをめぐる一考察」、『ことわざ学入門』、
遊戯社、pp.112-125